
リズム

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リズム

【Nコード】

N3329U

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

ふと大学に行きたくなかった一日のお話。

安物の腕時計を買ったらベルトの部分が余ってしまった。手を下げると甲の部分に文字盤の重さが掛かる。洗面台に映してみるとそれはひどく不恰好に見えた。

時間なんてのは携帯電話を開けばわかる。だからわざわざ腕時計をつける意味は大してない。重たいし、不便なだけだ。格好をつけたつもりだった。けど金を溝に捨てただけのようだ。どうして俺はいつもこうなんだ。誰かのせいにしたかったが、その誰かはいつも見つからなかった。

外に出てみる。アスファルトは夏の日差しを吸い込んで、隣に住む女の撒いた水を水蒸気に変えていた。大学に行くため、俺は駅までのわずかな道を歩く。毎日通う道というのは変化がない。ひどく退屈だった。景色だけでなく通行人までもが固定されていることに気付いてからは、益々苛立ちが募っていった。だからといって道筋を変えようとは思わない。きつと文句を垂れている割に、そういう変化のない生活が、それなりに気に入っているのだ。

そのうち駅に着く。

ズボンのポケットに入れっぱなしの定期券を改札に通して、ホームに立つ。腕時計が重かった。快速急行の電車が風を巻いて通り過ぎていく。流れていく窓の向こうで、誰かが俺を指差して笑った気がした。そんなはずはなかった。だけど馬鹿げた妄想だと笑い飛ばせない。

何かが起こって欲しかった。

なんでもよかった気がする。その中でどこかのドラマや映画のように活躍する自分を想像して、空白を紛らわす。

だけど実際にその何かが起これば、誰かが何かをしている後ろ姿を見ているだけの自分がいるのだろーうなと思う。空想が冷めていく。「果たしてどこでなにを間違えたのか」

こんなはずじゃなかった。昔はもつと生きたかったはずだ。線路に向かって足を踏み出す自分を想像してしまい、溜め息を吐く。

電車がやってくる。高いブレーキ音を鳴らして止まる。機械的な音を立てて口を開く。人の群れと冷房の効いた空気を吐き出す。急かすような「扉が閉まります」のアナウンスが掛かる。なんとなく電車に自分の人生を消化されているような気がした。手足から順に温い空気の酸に溶かされていく。往復百二十分の中で、ゆっくりと時間をかけて。

そういう風に意識してしまえば、足はそれ以上前には進まなかった。ああやばいな、と思っている。これを持ち逃せば講義に間に合わない。頭ではわかっているのだ。けれど駆けてきたスーツ姿の男が一人飛び込んだのを最後に、電車は口は閉じてしまった。俺は食われなくなかった。

動き出した電車が徐々に速度をあげていく。

やがて風を残して去っていった。

その風もわずかに俺の前髪を揺らしただけで、いつてしまった。

風は人を連れて行く。

七月の熱い風は俺をコンビニに避難させた。今日が月曜日だったことを思い出し、俺は漫画の週刊誌を手にとった。ざっと目を通してみたがあまりおもしろいとは思わない。昔はこんなものでも喜んでいた気がする。用意されたストーリー。誰も死なない戦い。ご都合主義なハッピーエンド。

週刊誌を置いた。

どこかへ行こうと思った。

自分に縁のある場所がいい。

考えてみるとそれは驚くほど少なかった。中学時代から家と学校を往復するだけの日々が続いていた。家の事情でアルバイトをしていなかったから、友人達ほどカラオケボックスやボーリング場に入り浸りはしなかった。俺の生活は学校で始まり、学校で終わっていた。

もっと遊べばよかったな……。

あの頃、時間だけは山ほどあったはずだ。高校時代。意味もなく自分が万能な気がしていた。できないのではなくやらないのだと、どこかで信じていた。いまはもう、無邪気にそう信じることができない。

俺は紙パックのミルクコーヒーをレジに通し、陽射しの元へ出る。ストローを噛み潰して、少しずつ啜る。甘すぎるくらいに甘いコーヒーが胃に染みる。いつもと違う道は、なぜか俺を不安にした。心地いい不安だった。ほんの二年前、俺が高校生だった頃、あれほど通ったはずの道なのに、丁度取り壊されている建物に何があったのか俺は思い出すことができない。

何もかもが俺を置いて変わってしまったのではないか。

そんな気がして、少し恐かった。

高等学校の校舎を見上げて、俺は安堵する。それは俺の覚えているままの姿だった。正面は白く立派に見えるが、裏側は薄汚れているハリボテのあざやかさ。

桜並木が緑の葉をつけている。入学したての頃はきれいだなと、少しのあいだそれを見上げていた。夏の前に毛虫の駆除剤を撒いている光景を見て、なぜかひどく落胆したのを覚えている。今年も撒いたんだろうな。

俺は校舎に入った。入り口はきれいだ。上履きのない学校なのに、土埃一つ落ちていない。すぐ左手にある職員室を見る。

いるかな、と思い、覗いてみた。

居た。俺の担任だった先生だ。角の取れた四角形みたいな顔。細い目。大きい鼻。妙に口が小さい癖に、よく通る声をしていた。先生、と呼びかけようと思ったら、先生が先に俺に気づいて驚いた顔をした。窓際の奥の席から、教科書を抱えて歩いてくる。ワイシャツに似合わないサンダルがあ頃のままで、なんとなく嬉しかった。

「佐藤か。二年ぶりだなあ」

泣き袋のある細い目をもっと細くして先生は微笑んだ。

「はい。お久しぶりです」

「今日はどうしたんだ。俺に会いにきてくれたのか？」

「はい、ちょっと懐かしくなって」

「お前はイチ大にいったんだったな。元気でやってるか」

「まあ、ほどほです」

「そうか。相川や大橋はどうしてる？」

「最近は連絡取ってないですね」

「あいつらも、忙しいんだろうな」

「高校時代の友達なんて、そんなものなんでしょうか」

「そんなことないさ。お前から誘ってみろ。きっと集まってくる」

「そうですかね」

「ああ、あいつらだって、お前とバカやってるのが一番楽しかったはずだからな」

「……先生は、いまは？」

「一年生のクラスを持ってる。昔のお前らにそっくりだよ。物分りが悪くて大変だ」

先生は湿気のない声でカラカラと笑った。大学では聴かない、陰湿なところのない笑い声だった。なんだか聴いているこっちまで楽しくなってくる。

「佐藤は雰囲気が変わったな」

俺はどきりとした。

「そうですか？」

「ああ、大人の顔に近づいた。いろいろ大変だったんだろ」

頬が熱くなるのを感じる。なにか込み上げてくるものがあつた。俺はそれをぐっと堪えて、心の中に留めた。

「大学は自由だろ」

「そう、ですかね？」

「授業に出なくていいなんて、高校時代には考えられなかったろ？」
サボったのは、今日が始めてだけだ。

「それは、そうです」

「髪を染めてもいいなんて高校時代には考えられなかったろ？」

「そうですね」

「社会人になったらな。仕事はサボれないぞ。髪も染められない。サークルになんて割く時間は作れない」

「……はい」

「佐藤、いまだからできることをやってみろ」

少し躊躇ったあと、「はい」と、返事をする。丁度チャイムがなつた。細い手首に不恰好に釣り下がっている腕時計を見る。十時五十分だった。

「ああ、行かないとな」

数学？の教科書を示して、先生は歯を見せ、少し意地の悪い顔を作った。

「いまだから言うがな。お前の一年の時の追試、ギリギリ合格点に足りてなかったから、おまけしてやったんだよ」

いまのように自暴自棄になっていた、高校一年の末を思い出した。付きっ切りで教えて貰った公式を一つだけ忘れてしまって、半泣きで解答用紙を睨んでたっけ。

「じゃあ、物分りの悪い一年生達に数学を教えってくるよ」

先生が職員室を出て行く。

「先生」

その後ろ姿に向けて俺は言った。

「ありがとうございました」

「おう。がんばれよ」

先生は教室に行く。

俺は、今日は三限目からも講義がある。それにはまだ間に合う。けれど、まあいいか、という気分だった。

少しづつ、電車の腹の中で、子供の自分を溶かしていこう。そうしてみんな大人に近づいていくんだ。

だからいまはまだ子供でいよう。学校をサボって遊んでいるような。高校を出て、携帯電話をポケットから出して、俺はアドレス帳を広げた。

数回のコールのあと、繋がる。

「もしもし、相川か？ 久しぶり。いきなりだけど、これからさー
ー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3329u/>

リズム

2011年6月24日23時12分発行